



読売新聞社

そのあやこ
曾野綾子選集 5 全七卷

リオ・グランデ／たまゆら

昭和四十六年八月五日 第一刷

著者紹介 そのあやこ

昭和六年、東京に生まれる。聖心女子大学英文科を卒業。在学中より「新思潮」同人となり、昭和二十八年作家の三浦朱門氏と結婚。昭和二十九年「遠来の客たち」で文壇にデビュー。

『無名碑』『生贄の島』『生命ある限り』『誰のために愛するか』ほか著書多数。

本名 三浦知寿子

現住所 東京都大田区田園調布三の五の十三

著者 曾野綾子
そのあやこ

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座三の二の一
大阪市北区野崎町七七
北九州市小倉区明和町一の一
〒100
〒550
〒813

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

定価 六五〇円

©, Ayako Sono, 1971

曾野綾子選集

5

目次

リオ・グランデ

第一章	リオ・グランデ	7
第二章	黒い飛行機	22
第三章	怪鳥の卵	33
第四章	驟雨	49
第五章	獾と秃鷹	64
第六章	革命の火	77
第七章	ピルーの樹の下で	90
第八章	ラス・カサス沿線	99
第九章	ヌエボスたち	115
第十章	百種の緑	125
第十一章	日曜日	139
第十二章	白鷺	153

第十三章 百種の青

163

たまゆら

第一章 たまゆら

173

第二章 雪あかり

190

第三章 虹の命

199

第四章 泰山木

209

第五章 新妻たち

221

第六章 夜の香

233

第七章 発作

248

第八章 イタリリ駅

260

解説

巖谷大四

273

装丁
村上芳正

リ
オ・
グ
ラ
ン
デ

第一章 リオ・グランデ

1

二見周造が空港に着いた時、サンタ・クルス市のターミナル・ビルの灯はまだあかあかと輝いていた。彼は駐車場を探し、運転台を下りる時、ちらりと自分の足許を見て、はいている黒靴がきれいに磨かれているのに満足を感じた。足許のコンクリートの舗装の上には小さな水溜りがある。雨の水溜りではない。撒水車がまいて行った水にちがいがなかった。水溜りはほの白く夜が明けかかっていることを示していた。しかし頭上にはまだ星があった。赤道に近い空にはりついたボタンのような星であった。しかし感激することはない。星は星である。

二見は念入りに空っぽの車に鍵をかけてから、だだっぴろい駐車場を横切った。明け方の空気は首筋にひやかである。空港の建物の中に一步入ると、二見はむっとするような空気に人臭さを感じた。バジャマを着ただけの五つ位の子供が歩きまわっていた。これは通過客のアメリカ人にかがいがなかった。

二見はすぐに、片隅のソファに手もちぶさたな恰好で坐っている二人の日本人を見つけ出した。総領事の命令で送りに来ている副領事の依田と新聞の記者の香椎の二人である。

「いやあ、えらくおくれましたな。お眠いでしょう。これほど遅れるとわかっていたら、ホテルをひきあげて、私の家のほうにでも来て休んで頂けばよかったですな」

二見の声に、香椎も、そして依田もしぶしぶ立ち上った。

「わざわざ、こんな早朝にお見送り頂きまして、これは恐縮です」

「いや、最近とはみに朝早く目がさめるようになりましてね。年が年ですから。それでふと思いついて航空会社にきいてみると、果して一時間以上遅れるというじゃありませんか。それなら丁度目が覚めたところだから、朝の散歩にちょうどいい、と思ってお見送りに来たんですよ。コーヒーでもいいかがです」

「今、食堂から帰って来たところなんです」

依田は穏かではあったが、二見に言い返すように言っていた。そんな気のきかないことはしていませんよ、という調子だったので、二見はやむなく香椎の隣のレザー張りの長椅子に腰を下した。

「とにかくこの国の飛行機会社はひどいですよ。ひとを待たせることは当り前だと思ってるんですから。第一、時間

通りにいっても、ここを通るのは毎日、午前二時半なんですからね」

二見は、レザー張りの椅子の冷たさをどこか心の片隅で期待しながら手でさわって見たのに、それは冷たいどころではなく、何となくべとべとと生ぬるかった。そこに誰かが坐っていた、という訳ではなく、こちらがだまされているように、その椅子は一年中生ぬるいのであった。

「依田さんにも、もうお帰り頂くようにさっきから言っているんです」

香椎は、新聞記者らしく事務的で、しかもよく気がつく性格のようにみえた。

「馴れてますから、私は一向に平気です」

依田は言った。

「それに今、涼しくて、一日中で一番いい時間ですからね」

二見は受けてから、

「第一、途中で帰ったりしたら、総領事が御機嫌悪いですよ。総領事は何と言いますかなあ、私なんぞもシャッポをぬぎたくなるほどの完璧主義者かんぺきしぎしやでしてね」

依田は黙っていた。

「おかげで、大変よく便宜をはかって頂きました」

香椎は言った。依田が無表情に煙草をつけた時、売子のいない売店の傍のジューク・ボックスがやけっぱちのようにやかましく鳴り始めた。

「土着の音楽はあまりやらないんですね。アート・ブレイキーじゃないですか」

香椎が言った。

「ほほう、そうですか。そう言えばそうだな」

二見は言ったが、彼は決してアート・ブレイキーに詳しい訳ではなかった。

「日本人が民謡なんかあまりきかないのと同じですね」

香椎は言った。

「機械がアメリカからの輸入ものですからね」

二見は依田の言うことに同調して頷いたが、心の中では全く依田の愚かさにうんざりせずにはいられないような気が持だった。この気の小さい現地やといで役人になった男は、いつも当たり前のことしか言わないのであった。

「しかし、もう一週間？ 十日ですか。十日で日本ですな。羨ましいです」

二見はもう一度、搭乗口からみえる空を見た。空はさつきと比べるとますます淡く、クリーム色がかっていた。

「羽田から銀座裏に直行してのみ明かしましてね、翌朝、ちゃんと社に出ていたという猛者もうさもいますが、僕らはいけません」

「いいですなあ、日本の……」

と二見は言いかけたが、日本の何がいいのかよくわからなかった。

「二見さんも、そろそろ帰られるでしょう」

香椎が言った。

「その気配はないですか」

「本省へ行ってそんなことをおっしゃってごらんなきい、

『二見？ ああ、あいつはフィデリダでまだ生きてますかね』ってのが関の山でしょうな」

二見は声をあげて笑った。この卑屈な笑いには、大ていの相手がどぎまぎするので二見は面白く思うのであった。

「言葉の関係もありますね。英語だといくらも代りの人があるんです。しかしスペイン語となるとね」

依田が言った。

「そうそう。その意味で、私は仕事に満足しとりますよ。何しろ移民の方たちのための仕事ですからね」

二見は依田の意見に賛成してみせながら言った。この現地やといの男は、南米のウルグアイ生れである。高専ぐらいを日本ででたらしいけれど、生れた国の言葉が喋れるのは当り前のことであつた。それなのに、彼は何かしら特別に高級な技能かなんぞのようにそれを吹聴するのであつた。

その時、アナウンスがあつた。

「飛びますね」

スペイン語など大してわからない筈の香椎が真先に言った。

「よかったです」

依田もいそいそと立ち上つた。この男は、もう体全体が

眠そうだった。

「もうこれで、いよいよ、こういう文化果つる国とも縁が切れますな」

二見は愛想よく言った。

「そんなことはありません。実に楽しかったです」

「それはそうですね。日本へ帰って、自分のうちに落ちついてみると、旅行中ひどい目にあつた所のほうが妙に懐しいそうですからな。もっとも、それは、ここで生水をのみましてね、アメーバ赤痢にかかつて入院なんぞして、一月ばかりひどい目に会つて帰つた男の話ですが」

「ま、それはそうですね。強烈な印象という点ではそれに違いありませんから」

三人は柵のところまで来た。

「ではお元気で」

二見はまず香椎と握手した。そしてこのまぎれもない日本人の悪気のない手を感じた時、二見は少しばかり感傷的になつた。二見の頭の上には、この国の大統領のホセ・マリア・カルドソの軍服姿の写真があつて、にこりともせずはこちらをみていた。

香椎が飛行機のほうに向つて歩き出す時、その姿は、もう黒白写真ではなく、ちゃんとした色彩写真とみえるほどに、夜は明けかかつていた。

依田と二見は、お互いにむつり黙りこくつたまま、戸外の柵の前で、目にみえぬ相手に最後の形式だけの尊敬を

払うために立っていた。空気には早くも日中のだらけた暑さの匂いのようなものがまざり始めていた。それは野卑な暑さであり、飛行機に乗って行く人間は何か非常に利口でましな事をしている、とり残された連中はどれもこれも阿呆面をしているように、普段の二見なら思うところだった。

しかし、今日、彼は一種独特の爽かさと自虐的な解放感を二つながら味わっていた。

飛行機がプロペラをまわし始めた時（一九六×年の夏現在、民間航空のジェット機はまだこの路線にまわされていない）彼は依田に機嫌よく言った。

「これでまあ、無事に終りましたな」

依田は「そうですね」と答えたが、明らかに二見の言葉の不愉快に思っている様子だった。彼は只、それに対して、二見が年上であり、その上、役所の俸給を比べてみても明らかに二見のほうが上であるというだけの理由で、辛うじて黙っているにすぎない、という印象を見せつけていた。何故なら五日間、香椎の世話をしたのは主に自分であり、一度ばかり夕食によび、半日そこらへんをちよつと案内しただけの二見が、「無事に終りましたな」などという感慨を抱くのは僭越だ、という表情が見えすいていた。

二見にはそれが又愉快でたまらなかった。この男は、間もなく日本から送られて来た「新聞で、あの新聞記者の書いた記事の中に、フィデリダの日本移民は必ずしも成功し

ていないという内容を読み、さぞかし憤慨することだろう。《あんなにつきつきりで世話してやったのに、あの恩知らず奴が！》と依田は考えるに違いないのである。二見はそれと思うと、背中がうずうずした。どんなに懐柔しようとしても、このフィデリダ共和国内の日本移民の状態を、完全に満足すべきものと書いてくれる新聞記者がある訳はない。

只、新聞記者や作家などという口ばかり達者な連中の来訪が、あまり好ましくないという点では、フィデリダ共和国、サンタ・クルス市の日本総領事館副領事依田一昭も、開発省移民局移民調整官・二見周造も恐らく同じであるに違いなかった。二見はそれを相手に言いたかったが、それはどう考えても依田の意をことさらに迎えるような結果になるのでやめてしまった。

「五日や六日、そのへんをちよろちよろ歩いただけで、何が書けるんですかね」

依田は二見に言った。この男も又、今日日本に帰って行く新聞記者に対して漠然とした不安を感じているらしいと思うと、二見は急に同志的な親しさのようなものまで感じそうになった。しかし彼はポケットからハンカチをとり出して、早くもじつとりと浮き始めた額の汗をふきながら言った。

「何しろ、書くことが商売の人ですからね。何かは書くでしょう」

飛行機の爆音にまけないように、二見は大声で答えた。

「しかし真実を書いてほしいですからね、こちらとしては」

「それはそうですとも」

二見はおかしさをこらえて賛成の意を表した。依田は本当に、新聞記者に真実を知りたいと思っているのだろう。それに、真実とは又、何という、大それた言葉だろう。真実とは、神さんか仏さんだけがご存じのことだ。同じ土地に百年生きていたとしても、その男がその土地の真実を知っているとは限らない。二見は今、依田が自分だけは真実を知っていると信じこんでいるらしいことがおかしくてたまらなかった。別の日本人に尋ねたら、彼は又、依田とはちがったフィデリダの真実を自分こそ話すことができる、と言うだろう。

何もかもが本当は幻影であり、同時にその当人にとってだけ真実なのだ、と言おうとして二見は思いとどまった。二見は今、日本式の物の考え方での土地の現実を割り切ろうとする一人の旅行者を内地へ追っばらったところなのであった。そして彼は爽快な気分であった。しかし二見は香椎に、ここで自分の仕事の都合のいいところを見てもらおうとか、見せてやろう、とかいう気はおきなかった。逆に、二見は総領事館がかくしておきたがっている現状をすっぱぬいた。いずれ、何かフィデリダ移民と日本の出先官僚に関するろくでもない記事が新聞に出ることになるだ

ろう。矢は既に放たれたのだ。しかしとにかく香椎という、異質の存在がなくなつて、このフィデリダの空気が本来の怠惰なものに帰るのが二見は何より嬉しかったのだ。

十分後に二見は、自分と依田に対する共通の^{なま}労りをこめて依田の肩を抱きながら、ターミナル・ビルを出た。

「勿論、車は待たせておありでしょう」

二見は言った。

「総領事車で来ましたから」

車は鼻先に、日の丸をたてるようになっていゝ総領事のクライスラーであつた。勿論、当人が乗っていないので、今、その国旗は巻かれて上に黒い覆いがかぶせられていたが、それだけで車には或る種の威厳がそなわつていた。

二見は依田がクライスラーに乗りこむのをわざといんぎんに見送つてから、自分の乗つて来た小型のドイツ車のところへ戻つた。

水溜りは早くも乾いていて、星はもうそのあとかたすらなかつた。

2

二見は目下のところ、中央広場に近い最新式の十四階建てのアパートの、十階のフラットに、息子と日系人の女中と暮らしていた。寝室は、使用人室をのぞいて三つあり、他に居間と食堂があつた。アパートの外壁は桃色に塗られた

上に更に所々、緑や白のタイルで飾られているというかなり俗っぽい代物だったが、中の様式はそれほど悪趣味でもなかった。何より冷房が完全なのは有難かった。しかしそこから眺められる景色は、お世辞にもいいとは言えなかった。

アパートのすぐ下は中央広場で、そこには年がら年中、西瓜や蜜蜂のたかった輪切りのパイナップルや、シロップを入れた氷水を売る屋台をひいた商人と、仕事にあぶれた男たちが、白い歯をむいて笑ったり、地面にねころんだりしてたむろしている。そこにはあくどい臭気が溜っていて、旅行者などは思わずハンカチで鼻をおおいたくなくなるしかった。地面には西瓜の食いかけや種が散らばっていて、その種と蠅とは、とうてい見わけがつかなかった。

その上に更にうつつというしいのは、アパートの真下にあるマンガローの老樹の並木だった。なぜ、椰子を植えないのだ、と二見は思った。二見はあの帝王椰子の毅然とした風格が好きだった。しかしマンガローときたら実が熟して落ちる頃には、広場の臭気は更に渾然としたものになるのである。

僅かにその繁みの間から見える白い建物、うつつという色に一応のしまりを与えていた。それがこの市で第一のホテルといわれるコンティネンタルであった。入口には小さなネオン・サインの看板があり、赤で「エル・ランチョ」、青で「カブリ」という文字が交互に浮ぶようになって

ている。エル・ランチョは酒場の名で、カブリは食堂であった。

このネオン・サインが一際輝いてみえる夜はまだよかった。空気は冷えて多少まともになり、星が空にぶら下って、いてあたりは何もみえなかった。ネオン・サインの下に、娼婦らしい黒髪の胸の大きい女が立っているのがみえる時もあった。

しかし、同じ光景が、この昼間の白っぽい陽の中では、言いようもなくだらけてみえた。コンティネンタルの屋根の上には、この国の政府が保護島に指定している禿鷹がとまっていた。そして森のような、濃い緑の間を点綴する白っぽい建物や鮮かな煉瓦色の屋根瓦や教会の塔の向うを、どの方角に視線をのばしても、それは一定のところまで来るとくつきりととぎれて、もやとも光ともつかぬぼうようとした空間に消えている。

その空間こそ、リオ・グランデ河の正体であった。合衆国とメキシコの国境を流れる有名なリオ・グランデ・デル・ノルテではない。フィデリタダ国の大河という意味のリオ・グランデである。この大河は日本人の考える河の概念とは凡そかけはなれたものであった。それは泥色の水を、ぬらぬらと陽に光らせる途方もない水の壁であった。

壁。それは嘘ではない。二見は九年前初めてここへ来た時、或る町角に立って、すぐそこに茶色い高い壁か塀のようなものが立ちふさがっているのを見た。それは強いて言

えば、学校か兵營か刑務所の塀に似ていた。しかしその塀は小さいさざ波をたてながら生き物のように光っているのだけが違った。

それがリオ・グランデであった。倉庫の向うにも、水上警察の粗末な小屋の裏庭にも、墓地の背景にも、時々思いがけぬところにこの壁は立ちはだかつて見えた。そしてこの泥色の水は、河口のプエルト・コルテスまで、まだ、百キロもこうしてあきることなく続いているのであった。

その朝二見がアパートの窓から見た風景も又、何ら変ってはいなかった。ホテルのネオンは消え、娼婦の姿もはやなかった。気温は次第にのぼり始めているのが陽ざしの強さでわかった。

二見の一日はまずシャワーを浴びることから始った。冷房がきいていても水道からでてくる水は適当なぬるま湯である。そしてその水は色がついていた。あるかなきかのリオ・グランデ色と二見は呼んでいた。この町の人間は白いシャツを着ているつもりでいて、実は少しばかり泥水にそまつたものを身につけている訳であった。町中の白さに対する観念がすでに狂っているのだから、それは大した問題ではなかった。只、時々高い関税のかけられているアメリカ煙草を吸う時だけ、二見はその煙草の紙の白さに感動した。そのような白さが、サンタ・クルスの町にはなかなか見当らなかった。そしてその感動を味わい、自分の感覚の

狂いを少しでも修正するためにだけ、彼は時々大しておいしいとも思えないアメリカ煙草を買うのであった。

彼がシャワーを浴び終った時、居間の方で電話のベルが鳴った。日本人のフィデリダ二世の女中が出て、日本の総領事からの電話だと浴室の外でどなった。

香椎の乗った飛行機が落ちたに違いない、と二見は何故ともなく思った。この国の連中は、飛行機事故に対する本能的な恐怖心に欠けていた。そして飛行機は下らない理由のために平気で落ちるのであった。管制官が勤務中に女友達と喋っていて注意がおろそかになったとか、整備員がボルトを一本しめ忘れたとか、というようなことである。葬式は教会で華やかに行われるが、関係者は大ていの場合逃亡した後で、原因も責任もつきとめようがなかった。

「二見です、お早うございます」

バスローブを引っかけただけの姿で、二見は受話器をとらあげた。

「志沢ですがね」

二見は顔をしかめた。彼は志沢総領事のこの勿体ぶったものの言い方が嫌いだった。

「早くからさわがせました、あなたが家を出ないうちにと

思っ

てね。香椎さんはたっ

「は？」

「彼が払わないと言ったのかね。飛行クラブのほうでは、あんたがこっちへもって行けと言ったと言っているんだ」
皮肉な調子が流れて、二見は総領事の亀のようなつるりとした顔を目に浮べた。

「総領事がお払いになるのかと思いましたが、万事そちらで接待なさるからとおっしゃったので、移住協会の稲垣君も私もうっかりさしでがましいことをしてもなにかと……」

「そりゃ、便宜は計りますよ。しかし、金のことは、あんた、向うは仕事で来たんだから取材費用を出すのは当然だろう」

「はあ」

二見は考えるふりをしてから、

「どう致しましょう」

とわざと相手の意見を求めた。

「どう致しましょうって、こっちはそんな事はお引き受けできませんよ。あなたがそう言ったんだから、そちらで何とかしてほしいね」

「はあ、では仕方ございません。稲垣君と相談の上で、私もどもで払うことに致します」

「そうしてくれましたまえ」

電話は不機嫌にぶつり、と切られた。しかし二見は陽気に口笛を吹き始めた。彼が口笛を吹くなどというのは珍し

いことである。

七年前、いや、五年前の二見でも、総領事にこれだけ不愉快な顔をされると、かなりこたえたものであった。五年前、と言えば、志沢がここの総領事館に初めて赴任して来た時である。彼は総領事としての初めての演説の時には、リオ・グランデ流域の、三万人の日本人入植者のために働けることになったのは、私の非常に名譽とするところである、というようなもつもらしいことを言っていたが、その言葉については後日譚がある。

二見はたまたま、彼の赴任直後に開かれた天皇誕生日のパーティの席で、志沢が居合せた日本人に話している言葉を耳にした。

「本当はマドリッドへ行かないかという話もあったんですがね、私は、同じやるならここのほうがやり甲斐があると思ったですよ。マドリッドじゃ、あなた、失敗もない代りに面白味もない。何しろここの人間の数こそ少いけれど、この河の流域全部の日本人の責任を負うことになる。そう申しちゃんですが、陛下より若干広い面積の土地を私が治めることになるわけですから」

実際には、志沢はマドリッドに行きたかったに違いないのである。或いはメキシコでもよかった。しかし、フィデリダのサンタ・クルスに來た以上、この仕事に意義を感じないということはもつとみじめだった。彼は三万人の日本移民を彼の民草と思うことで、この仕事に意義があると自